

主の食卓の制定とその目的

【聖書箇所】 マタイの福音書 26 章 26～29 節

ベレーシート

●イエシュアがエルサレムに上られたのは、単に過越の祭りを祝うためではなく、**受難**(苦しみを受けること)と**贖いの死**(十字架刑で殺されること)のためでした。「受難と死」、それは一日にして起こった出来事であり、過越の食事から始まっています。その食事の途中で、イエシュアを裏切ろうとしているイスカリオテのユダが、イエシュアに促されるようにしてその行動を開始します。食事を終えたイエシュアの一行はエルサレムを出てオリーブ山の方へ向かい、ゲツセマネというところで祈りを終えた頃に、裏切ったユダがイエシュアに近づいたことで、イエシュアは逮捕され、徹夜で不当な裁判を受けます。ここからが真の意味での「受難」(パッション)です。そして「贖いの死」を遂げるのはその日の夕刻(午後三時)です。イエシュアの逮捕から始まる「受難」から十字架上での「贖いの死」を遂げるまで、なんと 78 節分が割かれています。

●逮捕されるまでの間に、イエシュアは過越の食事を置き換える「主の食卓」の制定と、エルサレムを出てオリーブ山に向かう途中で予告した「弟子たちのつまずき」、そして「ゲツセマネでの祈り」が続きます。今回はその最初の「主の食卓(晩餐)」(=後に、「パン裂き」とも「聖餐式」とも呼ばれるようになります)の制定の出来事(26:26～29)とその目的に目を留めたいと思います。

【新改訳 2017】 マタイの福音書 26 章 26～29 節

26 また、一同が食事をしているとき、イエスは**パンを取り**、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「**取って食べなさい。これはわたしのからだです。**」

27 また、**杯を取り**、感謝の祈りをささげた後、こう言って彼らにお与えになった。

「**みな、この杯から飲みなさい。**」

28 **これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です。**

29 わたしはあなたがたに言います。今から後、わたしの父の御国であなたがたと新しく飲むその日まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは決してありません。」

1. 主の食卓の制定の目的

●ここにある主の食卓の記事は、マルコ 14 章 22～25 節、ルカ 22 章 14～23 節にもあります。つまり、すべての共観福音書がこの主の食卓の出来事を記しているのです。ただし、ヨハネによれば、イエシュアとその弟子たちがこの主の食卓を祝ったのは、本来の過越の食事の一日前であるとしています(13:1)。とすれば、共観福音書が記している主の食卓は、本来の過越の食事の前日にしたことになります。そうすることで、実際、過越の羊が神殿で屠られる時刻とイエシュアが十字架上で息を引き取られる時が一致するのです。神殿で屠られた羊は民衆に分かち与えられ、新しい日を迎える夜に食されます。その一日前にイエシュアは主の食卓を制定することで、**これまでの過越の祭りを終結させて、新しい主の食卓に取って代わること**を弟子たちに示したことになります。この点

מתי

がとても重要なのです。しかも、この新しい主の食卓は、「新しい契約」(エレミヤ 31:31~34)を結んだことでもあるのです。ちなみに、ヘブル人への手紙ではこの「新しい契約」のことが繰り返し語られています(8:8~12,10:16~17)。

●主が制定された食卓のことを、初代教会では「パンを裂き」(使徒 2:42)とか、「週の初めの日に、パンを裂くための集会」(使徒 20:7)と記しています。後のキリスト教会では「主の晩餐」とか「最後の晩餐」と言うようになり、「聖餐」あるいは「聖餐式」とも言われるようになりました。イエシュアを裏切ったイスカリオのユダが立ち去った後にこの食卓が制定されたことから、これは主を信じる者たちだけでなされる食事とされて来ました。しかし今日、日本のキリスト教会では、それに与る者は信者に限らないという考え方も出て来て、物議を醸しています。使徒パウロは、主の食卓のことで混乱を招いていたコリントの教会に対して、次のように述べています。

【新改訳 2017】 I コリント人への手紙 11 章 23~27 節

23 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えました。すなわち、主イエスは渡される夜、パンを取り、

24 感謝の祈りをささげた後それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」

25 食事の後、同じように杯を取って言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」

26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。

27 したがって、もし、ふさわしくない仕方でパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すこととなります。

●イエシュアとの違いは、パウロが、①「わたしを覚えて、これを行いなさい」、②「あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです」と言っていることです。つまり、①は「パンと杯に与ることで、主を記念する」ことであり、②は主の再来を待望しつつ、主の死を告げ知らせることです。したがって、27 節にあるように、ふさわしくないままでパンを食べ、主の杯を飲むことは、主に対して罪を犯すことになるかと述べています。「ふさわしくないままで」とは、からだである教会が分裂している状態のままであることです。一つのパンが裂かれ、一つの杯から飲むことは、からだそのものが一つであるという奥義を意味しています。主のいのちにあずかりながら、一致することなく、また主の再来を待ち望むことがないなら、その食卓は「ふさわしくない」のです。名ばかりのクリスチャンや救われていない者が主を覚えることも、主の再来を待ち望むこともないはずで、そのような人が、主のパンを食べ、主の杯を飲むことはふさわしいことでしょうか。使徒パウロは、それは主のからだと血に対して罪を犯すことだと言っています。この主の食卓はいのちに関することです。それゆえ、この食卓に与る者は自分を吟味しなさいとも付け加えているほどです(同、11:28)。

●イエシュアは過越の祭りに食される羊の本体そのものです。羊は「きよい動物」です。なぜなら、それは、①反芻するものであり、②完全にひづめが割れているものだからです。それはイエシュアをあかしするものでした。

①「反芻するもの」・・彼は神のみおしえを喜びとし、昼も夜も、そのおしえを口ずさむ人でした(詩篇 1:2)。しかも、この方はエルサレムに上り、死んで復活して、天に昇られた方です。この「上る」という語彙が「反芻する」と同じ語彙(「アーラー」 אָלַל)です。

パン

②「ひづめが割れているもの」・「割れる」と「パンを裂く」とは同じ語彙(「パーラス」 פָּרַס)です。イエシュア のからだは生けるパンであり、いのちそのものです。そのいのちを私たちに供給して下さることが「パンを裂く」という行為なのであり、私たちにいのちを供給して下さる唯一の方なのです。その方が「パンを取り・これを裂き、『取って食べなさい。これはわたしのからだです。』』と言われたのです。

2. 「主の食卓」は「いのち」にかかわる。

●ヨハネの福音書では共観福音書が記しているような「主の食卓」の記述がありません。どうしてでしょうか。ヨハネの福音書は福音書の中でも最後に書かれたものです。共観福音書が記す以上に、この食卓の重要性を認識していたはずで、ですから彼は主の食卓がきわめて重要な事柄であることを示すために、儀式的な行為ではなく、説教というかたちでそれを描いているのです。イエシュアによる「五千人の給食の奇蹟」(6:1~14)の後に、カペナウムの会堂で話された説教(6:26~59)の中にその奇蹟の真の意味が解き明かされています。以下の箇所はその中から抜粋したものです。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 6 章 53~58 節

53 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。

人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません。

54 **わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。**

わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。

55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。

56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、**わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。**

57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、**わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。**

58 これは天から下って来たパンです。先祖が食べて、なお死んだようなものではありません。

このパンを食べる者は永遠に生きます。」



●上記の箇所において、ヨハネは「主の食卓」(聖餐)の本質を明瞭に記しています。主の食卓におけるパンとぶどう酒は永遠のいのちを指し示す象徴です。目に見える「パン」を食べ、「ぶどう酒」を飲むことを通して、その奥に秘められている神と人との霊的ないのち、霊的な交わりの世界を、信仰によって味わうことを求めています。

●この説教に対する弟子たちの反応が記されています。「これはひどい話だ。だれが聞いていられるだろう」と言っ て、イエシュアにつまずきました。「ひどい」ということばは「気持ちが悪い」という意味です。彼らの多くの者がイエシュアが語った「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む」という表現につまずいただけでなく、イエシュアのもとを離れ去り、もはやイエシュアとともに歩かなかつたとあります。イエシュアを裏切った者はイスカリオテのユダだけではありませんでした。この時にイエシュアは次のことばを語っています。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 6 章 63 節

いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。

מתי

わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。

- 以前、当教会で、第三回「セレブレイト・スツコート」(2017.10.2~8)が七日間もたれました。その時に私は「聖餐」についての瞑想を分かち合いました。その中からいくつかを分かち合いたいと思います。

(1) 「主の食卓」は隠れた神の奥義

●「人の子の肉を食べ、その血を飲む」ことは、イエシュアを信じて、イエシュアのいのちによって生かされることを意味します。ところが、この世の御利益を求めていた人々はこの話につまずいたのです。この話ほど神の世界において重要な話は他にはありません。イエシュアの肉であるパンを食べ、イエシュアの流された血であるぶどう酒を飲むことが、イエシュアが「人の子」となってこの世に来られたことを集約しているのです。「主の食卓」に与るということは、この世の人の知恵によっては理解されることのない、いわば奥義として隠された神の知恵なのです。聖書は「食べる、飲む」という表現によって、それと一体となることを表しているのです。「最初のアダム」とその妻は「善悪の知識の木」から取って食べたことで、それと一体となってしまったのですが、人が「いのちの木」であるイエシュアを食べるためにこの世に来てくださったのです。ですから、イエシュアの肉を食べなければ、いのちを得ることはできません。血はいのちです。血だけが罪を赦す尊い代価です。イエシュアの血は贖い(身代わり)の血で私たちのために注ぎ出されたものです。ですからその血を飲まなければ罪の赦しはないのです。

(a) 「主の食卓」に与るとは、主のうちにとどまること

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 6 章 56 節

わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。

●「とどまる」はギリシア語の「メノー」(μένω)の現在形で、「とどまり続ける」という意味です。新共同訳は「つながる」、回復訳は「住む」と訳しています。英語では abide, remain, dwell, continue(関係を共に保つ)という訳語があります。「とどまる、住む」とはきわめて深い関係性を表わす語彙です。旧約聖書でこの関係性を表わしている箇所を挙げるとすれば、詩篇 15 篇 1 節と詩篇 91 篇 1 節です。いずれも同義的パラレリズムで記されています。

① 【新改訳 2017】詩篇 15 篇 1 節

【主】よ だれが、あなたの幕屋に宿る(「グール」גור)のでしょうか。

だれが、あなたの聖なる山に住む(「シャーハン」שֵׁחַן)のでしょうか。

② 【新改訳 2017】詩篇 91 篇 1 節

いと高き方の隠れ場に住む(「ヤーシャヴ」יָשָׁב)者

その人は 全能者の陰に宿る(「リーン」לֵינָן)。

●「宿る」(「グール」)、「住む」(「シャーハン」)、「住む」(「ヤーシャヴ」)、「宿る」(「リーン」)、これらはみな同義語と見なすことができます。そしてこれらヘブル語の語彙がギリシア語の「メノー」(μένω)の中に入っていると見なすことができます。「とどまる」ことの重要性をイエシュアは最後の晩餐の時に語られました。ヨハネがそのことを記しているのです。

(b) イエシュアにとどまることは多くの実を結ぶ

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 15 章 4～5, 8 節

- 4 わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。
- 5 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は**多くの実を結びます**。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。
- 8 あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子となることによって、わたしの父は栄光をお受けになります。

●「主の食卓」において、イエシュアの肉を食べ、イエシュアの血を飲む者は、イエシュアのうちに「とどまり」、イエシュアも「彼のうちにとどまります」(ヨハネ 6:56)とあります。この相互的な「とどまる」ということがどういうことかを理解することは容易ではないのです。霊性の大家アンドリュー・マーレーは「キリストにとどまる」という本の中でこのテーマについて 31 回分の瞑想をしていますが、理解することは容易ではありません。なぜなら、「とどまる」ということが**霊のことば**だからです。「とどまる」と訳された「メノー」(μενω)は、ヨハネの福音書 15 章だけでも 10 回使われています(ヨハネ福音書全体では 40 回)。ヨハネの特愛用語です。「わたしにとどまりなさい」「**わたしのことばにとどまりなさい**」「**わたしの愛にとどまりなさい**」と表現を変えながら、その「とどまりの様態」を表現しています。いずれにしても、「とどまり、とどまる」というかかわりがあるならば、実を結ぶことができます。しかしこのかかわりがなければ、決して実を結ぶことはできません。イエシュアを離れては、私たちは何もすることができないからです(15:5)。

●ところで、イエシュアの言われる「実」とは何でしょうか。ヨハネの福音書 14 章 27 節で語られている「**平安**」もその実の一つです。15 章 11 節では「**喜び**」、15 章 12 節では「**愛**」がそれに加わります。それらはいずれも神の祝福の総称である「シャーローム」(שלום)の側面と言えます。それらは地上に咲いたキノコのようなです。キノコは地下で縦横に張り巡らしている菌糸がもたらした花です。一つのキノコ(花)が咲くところには、その下には目に見えない無数の菌糸が存在しているのです。一輪の愛の花を、一輪の喜びの花を、一輪の平和の花を咲かせるにも、「キリストにとどまる」隠れた日々の歩みが不可欠です。主は私たちに多くの実を結ばせたいと願っておられます。それゆえ、「わたしにとどまりなさい」という主の招きの声をしっかりと心に刻み、私が主のうちにとどまり、主も私のうちにとどまるという、御父と御子に見られた歩みを意味しているのです。これが主の食卓が指し示している事柄なのです。単なる儀式では表し切れない事柄です。

(c) 「御父」と「御子」のうちに、とどまることの源泉を見ること

●「とどまる」ということがどういう生き方なのかを知るためのヒントとなる知恵は、旧約聖書の中に散りばめられていますが、その中の一つとして詩篇 91 篇 1 節の「**全能者の陰に宿る**」ということを考えてみることは有益です。「宿る」と訳された「リーン」(לין)の語彙が意味することは、「全能者の陰」とあるように、それは「隠された場」で、いつも一緒に過ごすということです。「隠れたところ」とは「シークレット・ブレイス」(secret place)で、「宿る」とは「神とともに過ごす」ことです。イエシュアが 12 歳の頃、祭りのためにエルサレムで両親とはぐれてしまいました。その両親に対してイエシュアはこう言われました。「わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」(ルカ 2:49)。両親にはこのイエシュアの語られたことばの意味が理解

ἰησοῦς

できなかったようです。12年間も一緒に過ごしてきたにもかかわらずです。イエシュアもそのことについてあえて説明はされませんでした。説明できない事柄です。イエシュアの弟子たちも「目がさえぎられていた」ので、イエシュアの言われることばの中に父を見ることはできなかったようです。私たちも同様ではないでしょうか。

●「シークレット・プレイス」は「力の源泉となる場」です。そこに自覚的に身を置くことが「宿る」(「リーン」 $\lambda\iota\eta$)が意味することなのです。そして「宿る」ことが、イエシュアの言う「とどまる」という意味なのです。それゆえ、神殿で教師たちの真ん中にすわって問答しておられるイエシュアの姿を見た人々が、イエシュアの知恵と答えに驚いていたとあります(ルカ 2:47)。イエシュアの両親も息子を見て驚きました。その驚きを表す語彙は異なっていますが、いずれにしても目に見える姿ではわからないものなのです。ある局面において、それが現れるのです。ここでのイエシュアの姿こそ「全能者の陰に宿る」者の姿が現わされたと言えます。12歳のイエシュアはそのような御父とのかわりを保ちながら、18年間隠れた生活をして後、公生涯に入られました。このことを思う時、「とどまる」ことがただ事ではないことが分かります。そのような生活への招きが「主の食卓」とするならば、何と私たちは疎い者かと思わされるのです。

(d) 主に食卓に与ることは、永遠に生きること

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 6章 57~58節

57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。

58 これは天から下って来たパンです。先祖が食べて、なお死んだようなものではありません。

このパンを食べる者は永遠に生きます。」

●ここには「生きる」を意味する動詞「ザオー」($\zeta\acute{\alpha}\omega$)があります。このギリシア語に相当するヘブル語は「ハーヤー」($\eta\gamma\eta$)です。ちなみに、動詞「ハーヤー」($\eta\gamma\eta$)の初出箇所は創世記 3章 22節で、「永遠に生きないように」(新改訳)、「永遠に生きる者となる恐れがある」(新共同訳)と否定的・消極的な内容で使われています。善悪の知識の木から取って食べた者はそれと一体となってすでに死んだ者です。神はその死んだ者がいのちの木から勝手に取って食べて永遠に生きることがないように、最初の人アダムとエバをエデンの園から追放しました。その理由は、**神の手続きによらなければ、死んだ者は永遠のいのちにあずかることはできないから**です。その神の手続きこそ、イエシュアの「受肉からいのちを与える御霊となられる」までの一連の出来事です。つまり、キリストの贖いの一連の出来事なのです。

キリストの贖いの一連の出来事



מתי

●しかし今や、イエシュアの贖いの死によって、「最初のアダム」が受け継いできた罪の苦しみと死を完全に終結させてくださり、「新しい契約」をイエシュアは結んでくださいました。「新しい契約」とはエレミヤ書 31 章 31～34 節です。この新しい契約に、私たち異邦人もイエシュアにある教会という形で接ぎ木されているのです。

【新改訳 2017】エレミヤ書 31 章 31, 33～34 節

31 見よ、その時代が来る——【主】のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、**新しい契約**を結ぶ。

33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。

わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。

わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

34 彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『【主】を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、**わたしを知るようになるからだ**——【主】のことば——。

わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」

ベアハリート

●マタイの福音書のテキストに戻りましょう。26 章 29 節のイエシュアのことばです。

わたしはあなたがたに言います。今から後、わたしの父の御国でああなたがたと新しく飲むその日まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは決してありません。

●イエシュアは主の食卓について話した後で、「わたしはあなたがたに言います」と一言付け加えています。しかもイエシュアはここで「天の御国」を「わたしの父の御国」と言い換えています。意味はまったく変わりません。ユダヤ人にとって「天」と「わたしの父」とはイコールだからです。むしろ次のことばが重要です。それは、「**あなたがたと新しく飲むその日まで**」ということばです。このことばは、過越の食事の最後に飲む杯(四杯目の杯)のことが背景にあります。その最後の杯をイエシュアは飲まず、むしろイエシュアが王なるメシアとしての宴会が催される日にそれを飲むことを楽しみにしているという意味です。しかし弟子たちは主の食卓によって杯を飲み続ける必要があります。ただしその杯は自分の罪を思い起こすためではなく、罪を赦すために血を一滴残らず注ぎ出してくださった主を思い起こすためです。やがて天の御国において訪れる婚姻の祝宴の希望、このことも今回の「主の食卓」の中に込められた重要なメッセージなのです。

●単に「主の食卓」(聖餐)の儀式に参加するだけでは、形式的ないのちのないものになってしまいます。主の食卓がいのちあるものとなるためには、日々、イエシュアのうちにとどまり、主のパンを食べることで主を知る喜びに与り、やがてメシアの再臨によってもたらされる御国の約束を待ち望んで、永遠のいのちを生きる希求者とならなければならないのです。

2021.8.29